Japanese Association for Religious Studies

棄は意志の消滅を意味しない。このような形で特殊性から浄化され、純化された主体は、神のうちにありつつ、なおかつ意志する主体として保持される。この構造は『エンツュクロペディ』で語られた「客観的思想」と類比的な関係にある。「思考」は経験的対象から特殊性を剝ぎ取ることによって普遍性へと高め、それを「思想」として我有化する。つまり考えることによって私は対象の許に居合わせつつ、私自身の許にも居合わせているのである。ヘーゲル的な意味で「自由」と呼ばれるこの構造を、哲学と同様に祭祀もまた備えている。この意味で、哲学と祭祀の類比的性格は語られるのだと考えられる。

ヴァイマール期ドイツの宗教思想

宮嶋俊一

ヴァイマール期ドイツの宗教的・思想的状況は、これまで以下のように特徴づけられてきた。まず伝統的なキリスト教教会において様々な動きがあったことは確かだが、全体としてその力は弱まった。だが「宗教」そのものへの関心は高く、様々な宗教・精神運動がキリスト教教会の外部で盛んになった。また、とりわけリベラルなプロテスタンティズムを背景として、今日我々が宗教学と呼ぶ営為が展開した。そうした状況下でフリードリッヒ・ハイラーも活動していた。

ハイラーは宗教学者であると同時にドイツ高教会運動において指導的な役割を果たし、この運動の理論的支柱ともなる「福音主義的カトリック性」という思想を鍛え上げていった。ここでいう「カトリック性」として、それが普遍性を意味すると同時に雑種性、すなわちカトリシズムの中には歴史的に様々な宗教の要素が存在していることが指摘される。それゆえ厳しく制度化され、画一化されたローマ・カトリックの対極にあるとされる。また「福音主義的」とは、個人的・内面的な宗教性をその特徴とする。そして、その両者が統合されることにハイラーはキリスト教の理想を見出している。

一九二〇年代後半から三〇年代にかけて、ハイラーは「闘争」の中に置かれるが、その相手の一方は当時のローマ・カトリック教会であり、もう一方はナチズムに迎合していくキリスト者たちであった。そして両者に対する批判は内在的に結びついている。ハイラーにとって、「カトリック」とは普遍的・エキュメニカルであり、その本質において超国家的なものであって、その中には多様なものの統一が見られるという。その「雑種性」の中には元来、ナショナルな要素が含まれておりながら、しかもその本質は統一されている。そしてハイラーはローマ・カトリック教会の中央集権主義的姿勢を批判する。ローマ・カトリック教会は確かに統一されているが、しかしそれは閉鎖的に組織化されたものであり、それゆえカトリシズムが本来持っていた多様性を失っているからである。そして、それぞれの民族による言語を用いた典礼の必要性を説く。ゆえにここでハイラーは、ゲルマン的キリスト教という考え方に対して肯定的な評価を下す。しかしながらハイラーは、当時の「ドイツ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

的キリスト者」のキリスト教を「ゆがめられたナショナリズム」によるものとして批判する。すなわち、それはドイツの民衆的（フェルキッシュ）な要素をくみ取っておらず、真のナショナリズムとは言えない。そしてハイラーは、政治的なナショナリズムに対して、キリスト教的なナショナリズムの必要性を説く。真のナショナリズムは、政治的な権力への意志によって成立するのではなく、「神に満たされた魂」であり、それは民族を分断するのではなく結びつけるものとされる。

ヴァイマール期の宗教思想を大きく捉えていった場合、キリスト教教会の内・外という区別を立てるとすれば、ハイラーの宗教思想やそれに基づく運動はその「間」で展開されていった。カトリック出自でありながら、当時のカトリック教会の反近代主義的方針に反発し、教会制度を脱しつつも、そこから完全に離れた脱キリスト教的な宗教運動を展開するには至らず、むしろその外部からエキュメニカルな活動を展開していった。そしてその思想はナショナリズムを肯定しつつも、より普遍的な理念を掲げて活動を展開していた故に、当時の国家社会主義的な流れに飲み込まれることはなく、ゆえにその運動は戦後へと引き継がれた。今回の発表では触れることができなかったが、戦後ハイラーの宗教思想・運動はキリスト教諸教派の協同から、さらに諸宗教の協同、さらには合一を目指すものへと展開していくのである。

ティリッヒの「究極的関心」と真理

澤井治郎

二〇世紀初頭、ドイツで神学者としてのキャリアを積んでいたティリッヒにとって、アメリカは哲学的にも神学的にも後進国であった。一九三三年、その後進国への亡命を余儀なくされた彼は、当初、もはや神学的・哲学的仕事は出来ないかもしれないという思いにかられ、憂鬱になっていた。しかし、そのアメリカで彼は自身の神学の集大成である『組織神学』（全三巻）を書き上げ、また「究極的関心」という現代の宗教学においてもよく知られている宗教概念を構築した。アメリカにおいて、ティリッヒは名声の絶頂を迎えたといえる。それでは彼は、アメリカに何を見出し、それは自身の思想展開にたいして如何に作用したのか。それは、当時のアメリカにおける宗教思想の理解にもつながる問題である。

そうした事柄を考察するために、まずティリッヒのドイツ時代の後半（前期II）と、アメリカ時代の前半（中期）の宗教論をそれぞれ概観し、両者を比較検討することによって、前者から後者への思想展開を探究する。特に、ティリッヒの宗教論および宗教的象徴論における「真理」の概念に注目する。というのも、後期の体系構想期には、彼の宗教論にとって象徴はますます重要度を増して、宗教を表現するために必須のものとされ、そこではほぼ必ず象徴の真理性ということが問題となるか

NII-Electronic Library Service